

「春になればうぐいすと同じに」

大田美和

聞で読み、詩集を注文したことがきっかけです。その後、最後の詩集『春になればうぐいすと同じに』の出版も新聞で知り、取寄せました。一読して標題作が気に入る、その後、春が来るたびに詩集を開いては声に出して読んできた大切な詩です。

この詩が教えてくれることはたくさんあります。長い人生における喜びの時間のほかなさと、愛と励ましの言葉は一生を照らし続けてくれること。文学表現においても、理性と感性の両方を磨く努力が必要であること。百年前の日本の台湾に対する植民地支配。高校生たちにとれぐらい言葉が届いたかわかりませんが、「うちの校長、どうして祝辞で詩を朗読したの？ 文学部教授だからかな？」という素朴な疑問だけでも湧けば、それが他者の言葉に心を開ききっかけになると思いました。心が動けば、身体が動きます。そのような出会いの可能性に賭けるのが文学という営為だと思います。

この詩の魅力の一つは、詩の中ほどで言及される

新型コロナウイルスの感染拡大による臨時休校中の高校のオンライン入学式で、学校長としての祝辞を述べることになりました。通常の入学式の式辞よりも短い時間で、一番伝えるべきことは何か？ 新自由主義と消費経済社会の中で、短期間にわかりやすく見映えの良い結果が求められる潮流に対して、文学と教育に関わる者として折に触れて発言してきたのは、自分が歴史と世界の中でどのような地点にいるのか立ちどまって考えることの重要性でした。祝辞には力のある言葉を引用したいと思い、すぐに永瀬清子の詩「春になればうぐいすと同じに」の一部を引用することに決めました。

永瀬清子の詩と出会ったのは、大学院生の頃、詩集『あけがたにくる人よ』の地球賞受賞の報道を新

月下のヒヤシンスの香りが、読後しばらく残ることです。宮澤賢治の童話「やまなし」の「なるほど、

そこらの月あかりの水の中は、やまなしのいい匂いでいっぱいでした。」の一節を連想させます。また、ギリシア神話の美少年ヒュアキントスの悲劇も永瀬清子の念頭にはあったかもしれません。先行する文学作品への敬意と引喩は、素朴な生活詩人とみなされがちな永瀬清子の、生涯培われた教養によるものでしょう。感性と理性の涵養が永瀬清子の詩に時空を超えて届く翼を与えていると思います。

私は二〇一九年九月に永瀬清子生家を初めて訪問し、中村智道監督の映画「きよこのくら」の上映会に参加しました。詩人を偲び、物を思うことができる空間の保存に尽力されている方々に感謝をこめて、短歌二首を捧げます。

草原で満天の星と対峙して天に帰らず詩を書いたひと

きよらかな水をたたえる井戸の水汲ませまいとぞ蜂の唸り声

※オンライン入学式の祝辞の動画は、YouTubeで視聴可能。

<https://www.youtube.com/watch?v=FRQ5M0nY98E&feature=youtu.be>

大田美和：歌人、中央大学文学部教授、中央大学杉並高等学校校長。専門は近代イギリス小説、ジェンダー論。著書に歌集『きらい』、河出書房新社、思考集『世界の果てまでも』北冬舎、研究書『アン・ブロンテ 二十一世紀の再評価』中央大学出版部など。ドキュメンタリー映画の学内上映会を通じたダイバーシティ教育を推進中。